少女小説

サマー、ハウス

永代美知代

一月も前から散々待ちあぐんで、云ひ暮らし、數へ暮らしたその夏やすみも、いよ〳〵今日限り學期が了つて、やがて明日と云ふ日から初まるのです。

夏休み！

まア何といふ嬉しい、懐しい言葉でせう！　數多い寮生の胸はたゞもう、この一言を聞いたゞけ、考へたゞけでも、わく〳〵と騒立たないでは居られません。高鳴る鼓動を無理と押し靜め〳〵、家郷の人達への土産物を取り揃へたり、行李を整理したり、さうするうちにも、刻、一刻、明日と云ふ日の來るのを待ちわびて居るのです。

『あなた明日の一番？』

『勿論よ、あなたは？』

『私だつて一番だわ』

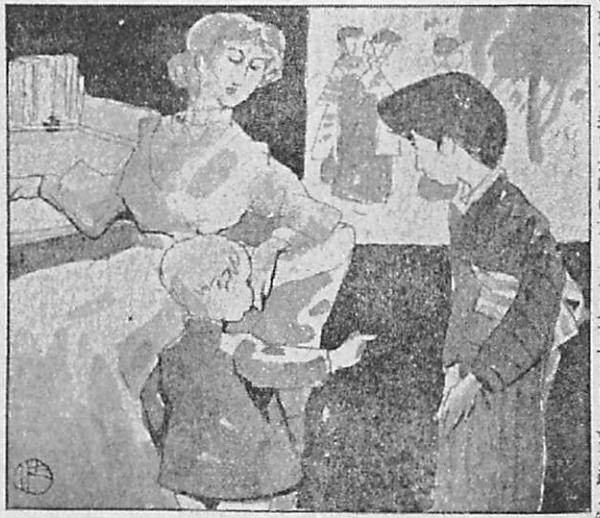
『おゝや御一緒にいらつしやらない？』

『えゝ乾度！』

斯うした會話が部屋にも、廊下にも、食堂にも、グラウンドにも、何處にも此處にも、ハッピーな聲で取り交されました。涙出模様の浴衣の袖を翻して。少女達は氣忙しさに、其處から此處へ走つて廻る。

謙子は夕暗の押し迫つたサマー、ハウスに、ハッピーな友達の群を離れて、たつた一人物思はしげに腰掛けました。リボン一つかけないで、質素な飾りけのない頭をうつむけて、淋しい〳〵顔を、ふつくりと、これぱかりは流石に少女らしい肉附の、眞白な片手に支えた樣子が、又なくいぢらしく見えました。

謙子には父もありません。母もありません。此の世の中に、骨肉と云つては姉が一人、遠い長崎の女學校に、丁度謙子が此校の校長に世話されて居る、それと同じやうに、彼地の學校の聖な尼樣に養はれて居るのがあるばかり物　附いた時分から、謙子は泌々人知らぬ心細さ、もの淋しさを味はねばなりませんでした。



それでも、毎日定まつた學課に追はれるうちはまだしも、忙がしさに多少慰さむ術もありました。謙子は悲しい、遣瀬無い、味氣ない思ひに襲はれる度には、矢鱈とスペリングの暗記にもかゝつて見ませうし、まぎれる節もありました。だが人皆に樂しい筈の夏やすみが來ましたとて、歸つて行くべき郷の無い謙子には、それが何でせう？何の嬉しい事がありませう？

嬉しい處か、謙子は今年の夏は何處へ、そしてどんな生活を送らねばならぬのか、差當り、行くべき處を探さねばなりません。

それは勿論、謙子一人の自由で決しる事も出來ません。否、校長の胸の中では、もうとつくに、謙子の運命は定められて居るのかも知れません、寄

食すべき人の家は定まつてゐるかも知れない――さう思ふと、謙子は思はず身を震はせました。

『嫌だ〳〵、若しかして去年のやうな嫁だつたら――』

去年の夏、謙子の身を寄せた處は、さる英國人の家庭で、夫人が甚いヒステリーな上に、お子達が大勢あつて、謙子は夜晝そのお守をしなければなりませんでした。勿論謙子は子供嫌ひといふではない、何方かと云へば好きな方なのですけれど、其處の家の子供は如何にもきかない子供ばかりで、おまけに佛蘭西語より知らない謙子は、つとまり兼ねて泣かされたのも一度や二度ではありません。

『貴女は馬鹿だ！』

『謙子の馬鹿やーい！』

のべつ、斯うした悪口ばかり吐いて、して悪い事など、幾ら謙子がよさせようとしても聞き入れません。大事な器物を毀したり、その爲めには隨分謙子の困る事も出來ました。

『貴女がよろしくないせいですよ』

その都度、謙子はヒステリカルな夫人から斯う、佛蘭西語で叱責されました。謙子が何か申譯がましい事を云ひかけますと、夫人は猶更不機嫌な容子で、白い眼を角立てました。

『何ですつて？』

そして斯う訊き返すのが癖でした。すると謙子はもう、返す言葉も無く、赤くなつて首垂れたまゝ、泣き寐入りに忍ぶ外はありません。之も皆、他家へ寄食して、他の厄介になつてゐる身の上だから、忍ばなければならん、耐へねばならん――謙子は悲しい心に、斯う長い〳〵夏の六十日を氣兼氣苦勞に暮じて、九月の新學期に學校へ歸つて來た時には、張りつめた氣がゆるんで、暫らくは自分でも何だか神經衰弱にでもかゝつたやうな氣持がするのでした。

『私にも皆様のやうに家郷があると善いのにねえ！』

謙子はうめくやうな聲で呟きました。

『あゝ母様さへ居て下すつたら！』

涙が長いまつげを傳はつて、思はずホロリと膝に散りました。

『私にだつて家郷があつたんだ』

謙子の眼の前には何時の間にやら、白塗の長い土塀に圍まれた邸が水に浮いたお城のやうに見えました。乳房のやうな形の金具のついた表門、それから上野や増上寺にてもありさうな銹のついた、古雅な石燈籠や、謙子は七つの歳までしか居なかつた田舍の士族屋敷の自分の家を、はつきり頭の中に覺えて居るのです。

『あゝあの時！』

夢見る人のやうに、うつとり考へ込んで居た謙子は、突然兩手に顔を覆ひました。

それは丁度母様が死亡てから、三七日一日目の夜でした。

『此見がこんなだのに、あゝ私は死んで行かねばな

末つ見の謙子は、七つと云つても一層の母様の見て、おまけに母様の死亡る四五日前から、重いはしかにかゝつて、病み惱んで居た。

ちんのか、氣遊りおや〳〵！」

斯う云ひ續けに、それでも倒頭母樣は死んでゐて了ひなすつた。

「これからはこの叔母樣が、二人の母樣になり代つてあげるからね」

町の女學校にお裁縫の先生をつとめて被在つた叔母樣が飛んで來て、泣き叫ぶ姉妹を慰めて下すつた。

夜も同じ寢床に、謙子は抱れて眠りました。

ふと眼を覺した謙子は、何處かでスーイ、スーイとマッチを摺るやうな音がするのを聞きました。

「誰樣？　誰樣かのし？」

次ぎの間に寢て居た老嬶が、不思議さうに、二三度聲をかけました。暫らく枕をもちあげて聞耳を立てゝ居た樣子でしたが、そのうち何の音もなくなつたので、老嬶は安心した風に、スヤスヤといびきを立てました。

と又、スーイ、スーイと物の音が聞えます。怖ろしさに謙子は、夜着の裏深く頭をかくして了ひました。

スーイ、スーイ、幽に〳〵引摺るやうなものゝ響が、段々謙子の身近く聞えて來るやうに思はれました。

「叔母樣」

「そつと搖りさましにかゝりますと、叔母樣はとつくに目覺めて被在つた樣子で、

「靜かに！　若しかしたら謙ちやんの母樣かも知れないよ」

と囁くやうな聲で被有つた。

「母樣！」

云ふより早く、謙子は懷しさにガバと蒲團をはね上げた。と一緒にコトリと音がして、謙子は部屋の外を彼方向きに、何かしら白いものが茫然見えたやうな氣がするのでした。

「母樣！」

重ねて斯う呼んだ時には、もう白いものも何にも見えない、たゞ枕元に置かれた丸行燈のありあけの灯が、幽にまた〳〵やうに搖めいて居るばかりであつた。

「屹度御新造樣が小嬢樣にお心をおひかれなすつて、おいでたのに違ひ御座いません」

老嬶は、その時の事を話す度に、斯う云つて鼻をすゝつて、そつと襦袢の袖で涙を拭きました。

「母樣に違ひない、母樣が私の病氣を心配して、わざ〳〵見に來て下すつたのだ！」

謙子は堅くさう信じて疑ひません、大きくなつて幽靈と云つた事を馬鹿々々しい事のやうに云ひ聞かされた今日でも、謙子はまだ母樣のおもかげ——あの白い姿が目先にちらついて、どうしても忘れる事が出來ません。

「母樣！　母樣」

謙子は飛び上つて叫びました。

「何を云つてらつしやるの！」

母樣と思つたその人は、此校の校長で、葉櫻繁るテラースを上つて、謙子の方に笑ましげに歩み寄りました。黑ずくめの尼服の上に頭から肩に垂れた純白の布が、謙子の眼には云ひ知らぬ懷かしさを感ぜずには居られなかつた。キラリ、キラリ、歩く度に胸のあたりに、搖れて閃めく銀の十字架も神々しい。

「先生！」

謙子は聲と寄り添ふた。十四の春姉と別れ〳〵に、斯うした慈悲深い校長の手に引き取られて居たらこそ、父も無い、母も無い、貧しく育たねばならぬ自分までが、今日人並以上の教育も受け得られるのである——謙子は今更のやうに感謝の眼を擧げた。

「先生、もう三年にもなります、いろ〳〵お世話になりまして……」

斯うお禮を云つた謙子の顏を見据えたまゝ、

「何のお恥かしい！」

年若い尼僧の眼から眞珠のやうな涙が溢れて落ちました。

「散歩しませうか」

「えどうぞ！」

二人は荒蘭に微笑み交して、靜かに歩いた。

「まア好い香ですこと！」

尼僧は立ち止まつて四周を見廻した。とつい側の木立に、アカシヤの花が、白い房を垂れて匂やかに咲き亂れて居りました。

（全續）